

在シドニー総領事通信

第 60 回 スノーウィ・マウンテンズと日本

令和 4 年（2022 年）4 月 29 日



クーマ・ライオンズ公園の姉妹都市鳥居前で
ライオンズクラブ・ロータリークラブ代表と（2022 年 4 月 21 日）

皆さん、スノーウィ・マウンテンズに行ったことがありますか？豪州最大のスキーリゾートとして有名ですが、実は日本の姉妹都市と長年の交流で結ばれています。今回、初めてこの地域を訪問し、コロナ後の姉妹都市交流再開に向けて意見交換を行うとともに、日本人彫刻家作品の除幕式に出席してきました。

今回の総領事通信では、スノーウィ・マウンテンズと周辺地域の近況や日本との交流について皆様にご報告しながら、今後の交流発展の方向性を一緒に考えていきたいと思っております。



クインビヤン姉妹都市公園（2022年4月20日）

●クインビヤン・パレラン市と南アルプス市

初日の4月20日には、豪州の首都キャンベラ市の郊外にあるクインビヤン・パレラン市を訪問しました。クインビヤン・パレラン市は2016年にクインビヤン市とパレラン市が合併してできた市ですが、今から30年前の1992年にクインビヤン市は山梨県八田村と姉妹都市提携を結びました。当時開催された「日本とオーストラリアの友好と国際理解」の講演会がきっかけのことです。

2003年には八田村を含む6町村が合併して南アルプス市となりましたが、その直後の2004年にクインビヤン市と姉妹都市の再調印を行いました。そして、姉妹都市提携20周年の2012年には、南アルプス市長がクインビヤン市を訪問しています。

クインビヤン姉妹都市公園には、1992年のクインビヤン市と八田村の姉妹都市締結時の銘板や、南アルプス市から寄贈されたモニュメント、市や学生の派遣団による多数の記念植樹などがありました。長年の交流の歴史がこの場に集約されていることに強い感銘を受けましたが、記念植樹は2015年が最後でした。



クインビヤン・パレラン市議会議員、姉妹都市確認文書と贈呈品
(2022年4月20日)

2016年に予定されていたクインビヤン市からの派遣は、同年のクインビヤン市とパレラン市の合併で見送られたとのことです。その後も、合併を受けての再提携・再調印が検討される中、今日まで往来は実現していません。

今回、クインビヤン・パレラン市議会の議場がある庁舎で、市議会議員代表と職員幹部との意見交換を行いました。議場入口の陳列棚には、八田村・南アルプス市との姉妹都市確認文書や贈呈品が展示されていました。

クインビヤン・パレラン市側からは、八田村が合併により南アルプス市になった時にはそれを乗り越えて再調印を実現してくれたので、クインビヤン市が合併によりクインビヤン・パレラン市になった今回も同様に乗り越えて再調印を実現したい、との力強いメッセージを受け取りました。

2019年にクインビヤン・パレラン市は代表団派遣を準備していたものの、同年の南アルプス市長選挙と2020年からの新型コロナウイルス流行で延期されてきた由です。また、以前訪日した際の楽しい思い出も伺い、心強く思いました。今後の早期の交流再開を期待しています。



コアラ保護区視察（2022年4月21日）

●スノーウィ・モナロ市と山鹿市・草津町

翌日の4月21日には、更に南に下ってスノーウィ・モナロ市を訪問しました。同市は2016年の合併により誕生した市ですが、合併前の旧クーマ市は1975年から熊本県山鹿市と、旧スノーウィ・リバー市は1991年から群馬県草津町と、それぞれ姉妹都市提携を結んでいました。

このうち、旧クーマ市と山鹿市は、2001年から毎年交互に市民・学生代表団を派遣して交流を続けてきました。クーマ側ではライオンズクラブとモナロ高校が中心となって派遣や受入を行っており、今回はライオンズ公園の姉妹都市鳥居（1頁目写真）などを案内いただきました。2019年には旧クーマ市から山鹿市に代表団が派遣されましたが（[両市交流 Facebook](#)）、2020年以降は新型コロナウイルスで交流が見合わされています。本年は8月を目途にオンライン交流を行い、来年からは実際の往来を再開予定と伺って嬉しく思いました。

このスノーウィ・モナロ市は、2019年から20年にかけて森林火災で大きな被害に遭いました。今回、ナレル・デービス市長の案内でコアラ保護区を訪問し、[トウサムズ野生基金](#)と[豪州国立大学（ANU）](#)の連携による[コアラ保護・育成の取組](#)や、[ポッサムウッド野生動物病院](#)によるカンガルーやウォンバットなど小動物保護の説明を受けて、生態系保護に取り組む関係者の強い熱意を感じました。



スレドボ視察（2022年4月22日）

また、スノーウィ・マウンテンズ最大のスキーリゾートであるスレドボも、デービス市長と市議員の皆様のご案内で視察しました。オフシーズン中もゴンドラやリフトを稼働し、マウンテンバイクやハイキングを楽しむ観光客で賑わっていました。ゴンドラを2年前に新設して輸送能力を大幅に増強したので、コロナ明けの今年の冬から本格的な稼働を見込んでいるとのことでした。

スレドボからは、豪州最高峰のコジオスコ山（標高 2,228m）に登山できます。さすがに登山は見合わせましたが、豪州で最も高度が高いレストランまでリフトで上り、素晴らしい眺めを楽しみながら昼食をいただきました。

スノーウィ・モナロ市の産業は農業と観光が柱で、特に冬は住民よりもはるかに多くの観光客と季節従業員が滞在する由です。好天に恵まれた山並みを眺めながら、冬のゲレンデの活気を想像しました。

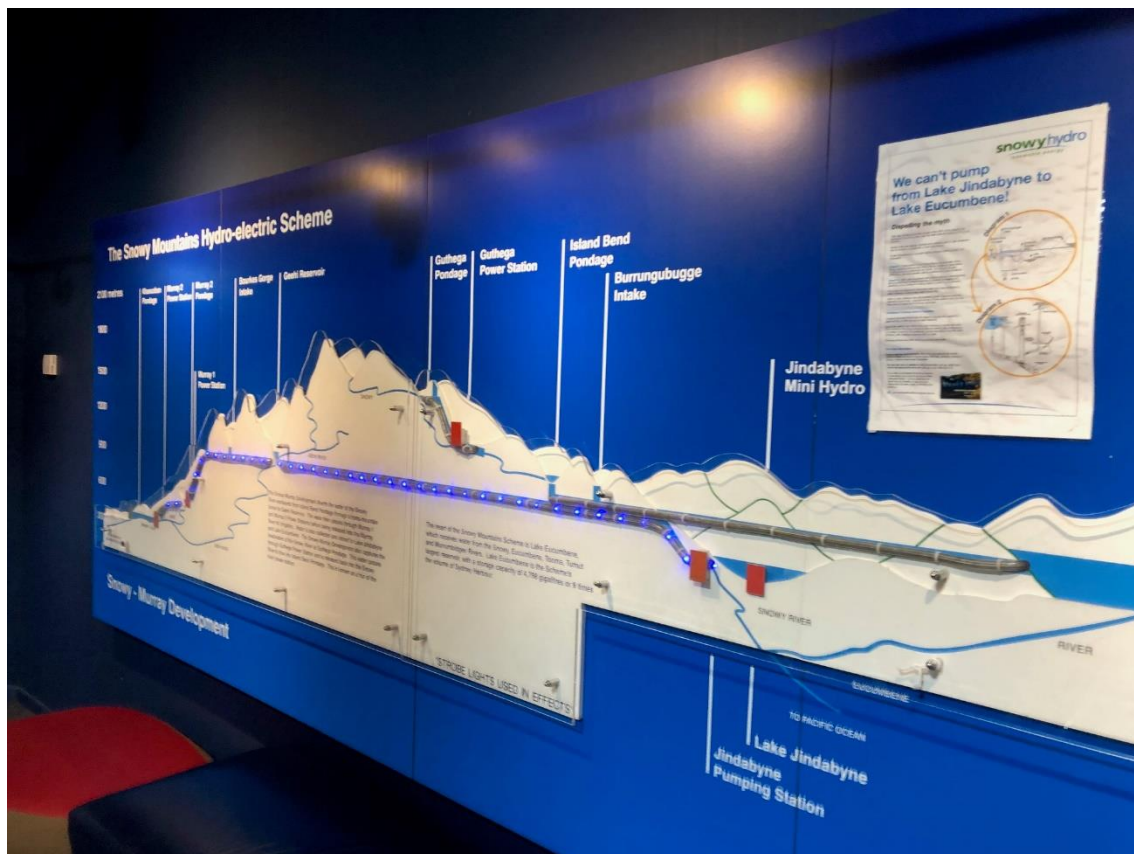


チャールズ・デービス写真館（2022年4月22日）

スノーウィ・マウンテンの大自然に生きる動物や鳥を撮影して多数の賞に輝く写真家チャールズ・デービス氏の写真館にも案内いただきました。同氏はナレル・デービス市長のご子息とのことです。

雪の中を歩くウォンバットの親子や、枝の上でお互いに寄り添うワライカワセミ、雪に映える極彩色の鳥たちなど、わずかな瞬間を捉えた多くの写真を見て、この地域の自然の素晴らしさを感じました。

私は、[“Big Step, Little Step”](#) という写真が一番気に入って、アクリルの置物をお土産に買いました。皆様はどの写真が好きですか？是非[ウェブサイト](#)でご覧ください。



スノーウィ・ハイドロ博物館（2022年4月21日）

スノーウィ・マウンテンズには、巨大な水力発電・灌漑施設があります。「スノーウィ計画（Snowy Scheme）」と呼ばれる国家的事業により、1949年から1974年までの25年間で16か所の大規模ダムと7か所の水力発電所が建設されました。総工費は8.2億豪ドルで、30カ国以上から10万人以上の労働者が動員されました。今回、[スノーウィ・ハイドロ博物館](#)を訪問してその歴史を学びました。

2002年にはNSW州・VIC州が株式を保有するスノーウィ・ハイドロ社が設立され（2018年に連邦政府に株式を売却）、揚水式水力発電所を主に活用しながら電力安定化サービスをNSW州・VIC州・SA州で提供しています。2017年にはスノーウィ2.0として揚水式水力発電所の新規建設を発表し、現在建設工事の準備を進めています。再生エネルギーの活用は電力安定化との組み合わせが不可欠なことから、スノーウィ・ハイドロの重要性は一層高まっています。

このスノーウィ・ハイドロ社がハンター・バレーに新設するガス火力発電所のタービンを、昨年10月に三菱重工業が受注しました。同タービンは世界最高効率であるのみならず、水素30%までの混焼に対応できることから、日豪ビジネスが脱炭素に貢献している典型的な例だと思います。



クーマ多文化センターの多国籍料理ビュッフェランチ（2022年4月21日）

スノーウィ・ハイドロ社が世界中から様々な技術者を雇用していることから、クーマには多数の外国人家族が住んでいます。スノーウィ 2.0 の新規建設に向けてその数は今後も増える見込みです。

このような外国人家族の生活をサポートするために、[クーマ多文化センター](#)が立ち上げられました。今回の訪問では、同センターの多国籍料理ビュッフェランチに招待され、活動について説明を受けました。

外国人技術者の配偶者や子どもは孤立することが多く、このセンターが「第二の家」となって、生活や職探しを支援しているとのこと。センター内のホワイトボードには、銀行口座の開設や活用についての講義内容が書かれていました。多文化社会が機能する上で、このような取組が重要だと感じました。



スノーウィ・モナロ市長主催ネットワーキング行事で
ニコル・オブラル NSW 州議員夫妻と（2022 年 4 月 21 日）

スノーウィ・モナロ市のデービス市長のご配慮で、姉妹都市交流や今回の視察の関係者を集めたネットワーキング行事が、訪問初日の夕刻に市内の自動車クラブで開催されました。市長による紹介を受けて、私からは同市の皆様に対して長年の姉妹都市交流に対する心からの感謝の気持ちをお伝えしました。

この会場で、本年 2 月の NSW 州下院補欠選挙で初当選したニコル・オブラル州議員とご主人のティム・オブラル元クインビヤン市長に初めてお会いしました。ご主人がクインビヤン市長当時の 2009 年に家族全員で訪日し、姉妹都市の南アルプス市で歓待されたのみならず、日本各地を回ったのが良い思い出になっているとのことでした。

また、スノーウィ・モナロ市にある牛肉加工の[モン・ビーフ社](#)に日本の[エスフーズ](#)から出向している宮田会長にも、会場でお会いしてお話を伺いました。原料価格の高騰により一時停止した工場の本年再稼働に向けて、現在準備を進めている由です。当館としても、このような日本企業を最大限後押しする所存です。



除幕式で、チャフィー・スノーウィ・バレーズ市長、
ハンドリー海辺の彫刻展創設者、牛尾敬三氏と（2022年4月22日）

●スノーウィ・バレーズ彫刻街道

4月22日午後には、スノーウィ・モナロ市からスノーウィ・バレーズ市に移動し、トゥーマにある歴史的建造物B&B (Brigham House) での日本人彫刻家作品除幕式に出席しました。これは、シドニーで有名な「[海辺の彫刻展 \(Sculpture by the Sea\)](#)」運営団体の新企画として、森林火災地域経済復興基金を活用し地元自治体と連携して「[スノーウィ・バレーズ彫刻街道 \(Snowy Valleys Sculpture Trail\)](#)」を立ち上げる一環として開催されたものです。

「海辺の彫刻展」には、1990年代末の開催当初から日本人彫刻家が参加しており、昨年5月はシドニー中心部のロックスで「[ロックスの彫刻](#)」と題する日本人彫刻展が開催されました。この「スノーウィ・バレーズ彫刻街道」でも、来月の立ち上げに先立って、日本人彫刻家の牛尾敬三氏の作品披露が行われました。除幕式を兼ねた夕食会には、海辺の彫刻展創設者のハンドリー氏、スノーウィ・バレーズ市のチャフィー市長他市議会議員、日本から来訪した牛尾敬三氏、地元住民など約30名が参加し、Tetsuya レストラン・シェフの料理を楽しみました。

今回の日本人彫刻家作品除幕式を機に、スノーウィ・バレーズ市は、日本との姉妹都市提携の可能性について検討を始めました。この「スノーウィ・バレーズ彫刻街道」には今後 20 以上の彫刻が設置され、日本人彫刻家の作品も多数を占める予定と聞いています。スノーウィ・モナロ市のみならず、スノーウィ・バレーズ市も日本との関わりが一層深まるよう後押しをしていきたいと思いをします。



牛尾敬三氏の彫刻「オウシゾウケイ」(2022年4月23日)

●姉妹都市交流がもたらす深いつながり

今回のスノーウィ・マウンテンズ地域の訪問で改めて感じたのは、姉妹都市交流が単なる観光旅行とは次元の異なる深いつながりをもたらすということです。

姉妹都市の相互訪問では、市を挙げての行事開催や、学校・経済団体による受け入れプログラムなど、相手側との対話や持続的な交流を可能にする仕組みが築かれます。そこから得られる経験は、観光旅行で見聞きすることよりもはるかに深いものとなります。

最近のウクライナ情勢を見るにつけ、危機が発生した時に頼りになるのはお互いの信頼関係だと感じています。日豪両国が今後安全保障から経済・文化まで協力・相互依存を深める中で、地方の草の根レベルでの深いつながりは、両国にとって本当に大きな財産となります。

スノーウィ・マウンテンズ地域と日本の関係が今後一層深まるよう、今回の訪問の成果を多くの皆様にお伝えするとともに、得られた出会いを大切にしていきたいと思います。

在シドニー日本国総領事 紀谷昌彦